

森林レンジャーがゆく

「菅生若宮子ども体験の森」で新しい森づくり (77)

今、菅生地区で活動する山林ボランティアが育ってきています。そんな彼らと植林しない森づくりを始めました。場所は、シタケの原木を採るために皆伐されたコナラ林で、菅生若宮子ども体験の森の奥にあります。一般的に伐採されたコナラは、その切り株からヒコバエが伸び、森が再生されるといわれています。しかし、老木の切り株は、再生能力が弱いうえに、森の中には、コナラだけでなく、たくさんの低木の切り株が残っているため、コナラだけが再生するわけではありません。実際に現場に立って目にする藪やぶには、さまざまな木々が育ち、人が分け入ることも難しい藪ほうがになっています。それは、さまざまな木々の萌芽や森の土の中で眠っていたさまざまな木々の種（埋没種子）が、皆伐により入った光によって一斉に芽吹いたからです。種によっては暗い森で何十年と発芽するチャンスを待っていたものもあり、一度、皆伐され明るくなった伐採地は無秩序でとても賑やかな藪になります。新たな森づくりは、その賑やかな藪を整理して明るいコナラ林を再生させる取組です。

一般的な森づくりは、植林地を整理して、新たな苗木を植林し木々を育てることで。しかし、ここでの取組はボランティアの方と将来の森の姿を想像して、残す木と切る木を選別し、今ある藪の力を借りながら整理を進めるやり方です。予定では、もともとこの地にあった明るいコナラ林に代表されるような落葉広葉樹林を目指しますが、選別する樹種によっては鎮守の森のような暗い森を目指すこともできます。ここで選ばれ、スクスク育つ木も、もともとはその場所で育っていた木で、最近流行の「潜在植生」をキーワードにした森づくりの私たちです。

南関東に位置するこの丘陵地帯は、木々が太陽の光を奪い合い、最終的には薄暗くても育つことができるアラカシやヒサカキなどが競争に勝ち残り、暗い森になっていきます（照葉樹林が成立します）。今はまだ、たくさんの木々が競争している段階ですが、人の手で藪を整理し、光条件を改善することで、目指す森の姿になっていくと考えています。（杉野）



伐採後の藪